

「宮錦袍」をまとった李白と「恩賜の御衣」を しのぶ菅原道真

黄 幼 欣

はじめに—「錦袍」とは—

中国の全面積の六分の一を占める新疆ウイグル自治区の首都ウルムチにある博物館（新疆維吾爾自治区博物館）では、西域と呼ばれたところの各少数民族の歴史や古代シルクロードの文化財などの出土品が時代順に展示され、世界に知られている。漢、唐代の豪華絢爛な絹織物のコレクションは数量や貴重さと精巧さから言っても、中国第一を誇る。その中で、千七百余年前の漢代の「錦袍」は、今、作られたか、と思うほど色鮮やかで新鮮さを感じ、入場者の目を惹く。

「錦袍」というのは錦の陣羽織か、宮中で作られた錦の衣である。その淵源を求めるならば、漢代しばしば匈奴の族長に贈与したことにまで溯ることができる。前漢では、常に錦や刺繍の衣服を西域の諸民族に与えたとの記載^①も残っており、一種の文化交流の贈物と見てもよからう。幸い、古代の西域は中国で最も乾燥した酷熱の砂漠地帯であり、その故、古墳などからの出土品にはなおその「錦袍」の姿を見ることが出来る。日中国交正常化三十周年記念を機に、東京国立博物館で「シルクロード 絹と黄金の道」展覧会（二〇〇二年十月六日迄）が開かれ、そこに展示された新疆文物考古研究所所蔵の「錦袍」（一～五世紀）がそれである。

王朝が替わって、例えば詩人李白の生きていた時代、唐の朝廷になっても、遠路はるばる長安にやって来た使節にやはり「錦袍」を贈与したり^②、そして武官や文官にも褒賞として下賜する場合がしばしばあった。清の康熙帝の時に陳

夢雷が編纂した『古今圖書集成』の記録（「貢賦」編）を見れば、中・晩唐の宮廷における「錦袍」使用量の多さを窺い知ることができよう。

（一）立身出世への登竜門

『三国志』を繰ると、人材コレクターとして有名な曹操の、関羽に対する厚遇の一つに、「錦袍」を贈ることが挙げられる。その他、銅雀台完成の祝宴で曹操の「錦袍」を賭けて弓比べをして見事に勝ち取った武将徐晃の話も有名である。武将に「錦袍」を下賜する例は多々ある。こうした天子から頂戴する着物「錦袍」は、陣羽織の他、宮中の礼装でもあるから、そう格別なことではありそうもないと考えられるかも知れない。しかし西域使節や朝廷の武官ではない人ならば、何故陣羽織の「錦袍」を贈るか、という点をまず見過ごすわけにはいくまい。武官以外の人、例えば文官には、「錦袍」を贈るその褒賞の名目は何を指して言うのだろうか。本論文の題名の一部「宮錦袍をまとった李白」について、詩人李白の場合を説明する前に、まず天子の御衣を頂戴した衛子夫の立身譚を紹介しておきたい。

それはもっとも浪漫的なラブストーリーであろう。李白の友人でもある詩人王昌齡は『漢書』の故事^③をふまえて、「春宮曲」^④という七言絶句の詩において、漢の武帝の皇后衛子夫のシンデレラストーリーを次のように艶美に描いている。

平陽歌舞新承寵　平陽の歌舞　新たに寵を承け

簾外春寒賜錦袍　簾外春寒うして　錦袍を賜ふ

早春のある日、武帝が禊の祭に出かけ、その帰途、姉にあたる平陽公主の御殿に立ち寄った。武帝のお越しを今か今かと思っていた平陽公主は、かねてより美しい女奴隷を何人か買い求めて、自分の屋敷においていた。衛子夫もその一人であった。この日、酒宴で歌舞を披露した彼女は、天子に見初められたのである。ふと天子が手洗いに立つと、ついて行ったのがこの衛子夫であった。御簾の外は早春の寒さ、武帝は寒かろうと御衣を脱いで、衛子夫にこれを着よと言って「錦袍」を下賜した、という。

中国では皇后を決めるときに、出身や身分の別で序列が決まるのではない。小役人の父が主家の洗濯婆さんと密通して生ませた私生児だった衛子夫は、正妻の子どもたちに奴隷扱いされて育ったが、使用人という出身でありながら、陳皇后を廃立させるまでに、天子の寵愛を独り占めにして、皇后の座に登りつめた。その後、武帝のほとんど終生の伴侶となり、運命が開け、やがて一族の栄達を果たした。彼女が頂戴したこの御衣の「錦袍」には、天子様から注がれた特別な愛情が込められており、いわば登竜門の意味が暗喩的に含まれているのである。これを念頭に置きながら、詩人の例を見てみよう。

(二) 宋之問の「奪袍」故事

七世紀後半、初唐後期の宮廷詩人の領袖といえ、宋之問を挙げることができよう。彼にまつわる故事がある。それは、則天武后の龍門での詩宴で「錦袍」を奪い返す（「奪袍」）という逸話である。

この故事の舞台である龍門は古都洛陽の南郊にあって、周知のように、その石窟は中国の四大石窟の一つに数えられており、石窟の造営は則天武后の時代を最盛期とする。龍門の重要な景勝地香山寺あたりは、伊水の東岸にあって、唐代のころ、文人墨客がよく遊び、南を望むと、洞窟と仏龕が蜂の巣のように見える。神龍元（七〇五）年十月のある日^⑤、武后は香山寺に遊び、自分の容貌に似せた盧舍仏が黄金に光るのを眺め、上機嫌になり、そこで酒宴を開き、従臣達に命じて、よい詩を作ってみよ、と。東方虬という役人が先に作った詩に対し賞品の「錦袍」を賜った。ご褒美を頂戴した東方虬が意気揚々と自席に戻り着席しようとしたその時、侍従職の宋之問が詩を完成し、献上する。朗読させたところ、一座の参加者から賛嘆の声があがり、武后は直ちに東方虬からその「錦袍」を奪い返し宋之問に賜り着せた、という。

この文人の「奪袍」故事が、文学史的資料として初めて見られるのは、『隋唐嘉話』という、唐の劉餗が著した隋唐間の逸話集にある「武后遊龍門」である。のちに歴史書^⑥や類書^⑦などにも頻繁に記載されているので、一般に知れ

渡るようになったのであろう。ちなみに宋之問が作ったこの優れた詩は「龍門
応制」と題して『宋之問集』に収められており、(北)宋の太宗の時に李昉ら
が奉勅撰した『文苑英華』の応制詩部門^⑧にも「駕幸龍門応制」として収めら
れている。「応制詩」とは、皇帝の命令で作った詩のこと。宴遊や行幸の場
において制作されたので、その多くは美辞麗句の応酬である。また貴族や高官の
屋敷で宴会が行われると、大抵詩人を列席させ、その場の有様を華麗な詩に作
って捧げさせたりする。一座の人々がみな詩を作りあって一つの詩集とし、後
の記念にする場合もある。その中で、よい詩を作れば「錦袍」を賜る。こうし
て則天武后の時から見られた朝廷詩壇の伝統が、のちの玄宗にも継承された。

そもそも中国の朝廷においては、「詩」と「宴」とは、君と臣下とが和楽を
するための大切な道具であった。そのような「文章経国論」という文学思想を
説いたのは、魏の時代の皇太子である曹丕(一八七～二二六年)である。彼は
建安七子という当時のすぐれた詩人を集め、東宮御所で日夜詩と宴に暮らすの
である。文会や宴席において作られた詩、いわゆる「侍宴詩」になぞらえるよ
うな風潮は、後世にも流れていく。

日本の「詩宴」の形態は漢詩文の平安期における興隆期の第一期、弘仁・天
長年間(八一〇～三三年)に完成されたが、はやく天智天皇の時代は漢文学が
盛んで、詩宴が頻繁に行われ、みんな競って漢詩文を披露したらしい。『万葉
集』巻一第十六番歌によれば、春正月の宮廷詩宴が行われ、萬葉女流歌人額田
王は詩人達の詩の宴に参加し、天皇の詔で同じ詩題で歌を詠んだ、という。佐
保の大臣と呼ばれた長屋王(六八四～七二九年)は、海外から使節が訪れると
必ず宴を催し、その内容も、漢詩文や詩宴歌といった特定のテーマを持っている。
『古今和歌集』は、この勅撰集がなぜ成立したか、その真名序によれば、
次のように説明している。

古天子、毎良辰美景、詔侍臣預宴筵者、献和歌。君臣之情、由斯可見。
天子と臣下が和楽する道具としての「和歌」は、先の曹丕の文学論を直接的に
反映させたと考えられよう。いかに中国の影響を受けた貴族的な風雅な遊びで

あったかが偲ばれる。後ほど述べるが、平安時代の文章博士菅原道真も時には宮中の詩宴に列して「応制詩」をたてまつる光栄に浴している。

そういった詩宴の付き物として、あるコンペティションが行われる。杜甫は崔駙馬という玄宗皇帝の婿にあたる人の宴席で作った即興詩（「崔駙馬山亭宴集」）で、当時の貴族の宴会での行事、いわば詩の競作を、次のように述べている。

客酔揮金椀 客酔ひて 金椀を揮ひ
詩成得繡袍 詩成りて 繡袍を得たり

宴会で、賓客が酔って、なお酒を酌み、宴もたけなわ、誰かよい詩ができれば、崔駙馬から「錦袍」を賜る、という。この詩の制作年代を天宝十四（七五五）年、安祿山が反乱を起こす年とする注釈^⑨があったが、その前の年天宝十三年秋に作成された^⑩と考えた方が妥当とされている。宴会を行い、終日酒を浴びるほど飲んだり、詩を作り「錦袍」を勝ち取る、といったことは、泰平の世でないと、なかなかできない贅沢かつ優雅なしきたりと思われるからである。すなわち「錦袍」は皇帝からのみでなく貴族高官からの頂戴物でもある。

この詩句、「詩成得繡袍」について、杜甫詩集の諸注本では、たいてい玄宗の祖母である則天武後の事跡として、前述した宋之問の「奪袍」故事を引いている^⑪から、ここでの「繡袍」を、宋之問が奪い返した「錦袍」と同じようなものと視ても差し障りはないだろう。唐の天宝に至るまでの政典を記す『通典』によれば、「繡袍」は則天武後の時からよく文武官に下賜したものという^⑫。ただし、それに対して『新唐書』では「皆法度無し、紀すに足らず」^⑬と厳しく批判していることも念頭に置いておくべきかも知れない。

ずっと時代が下っても、よい詩ができれば、褒美の賞品として「錦袍」を獲得する、という習慣は依然として続いている。明時代に「小杜甫」と称され、文武の才があった高啓（青丘）には、時の天子より「錦袍」を賜ったことを謝して作った詩（「謝賜衣詩」^⑭）がある。詩の中で、高青丘は「錦袍」を頂戴した後、直ちに着下ろし、天子の正殿の方に向かって拝した、と歌い上げる。そ

の珍しい紋は、天女が織ったもののようであり、新式の仕立て方は、宮中お抱えの職人が裁ったものである。君主の恩沢を被ること、かくの如く深厚でありながら、わが身、はなはだ劣にして、かの宋之問の如く、人の「錦袍」まで奪うような天賦の才能なきは、まことに慚愧に堪えぬ次第である、と明代第一の詩人高青丘は謙遜して歌っている。

(三) 李白の「獸錦奪袍新」逸話

時代をまた唐代に戻すが、宋之問の「奪袍」故事にあやかる類話としては、まず李白の「獸錦袍を奪い返す」(「獸錦奪袍新」)という逸話を取り上げなければならない。それはやはり杜甫の詩「李十二白に寄す二十韻」(「寄李十二白二十韻」)で見られる話である。史書の李白伝などは多く杜甫のこの詩を基にして李白像を描いていると思われる。この詩の一部を見てみよう。

龍舟移棹晩 龍舟 棹を移すこと晩く
獸錦奪袍新 獸錦 袍を奪ふこと新たなり
白日来深殿 白日 深殿に来たり
青雲滿後塵 青雲 後塵滿つ

ある日、天子が舟遊びをされる時、わざわざ棹をとどめて李白をお待ちになり、他人にくれるはずの「獸錦袍」(獸の文様が織り込まれている「錦袍」)を新たに奪い返して彼にお授けになった。この部分は、即ち宋之問の「奪袍」故事をふまえて、詩的才能において李白の右に出る者は一人もない、という賞賛である。無論李白を越えて天子の寵愛を得る者は一人もないことになる。こうしたことから李白は毎日のように宮中に出入りして天子の御前に出ている。権勢のある者につきたがる人々、雲の上にあるが如き身分の「青雲の士」と称せられる者もやってきて、彼の後塵を拝した。李白の名もいっそう天下にとどろいた。

清の時代になると、この「獸錦袍を奪い返す」ストーリーを髣髴させる逸話は張英らが奉勅撰した『淵鑑類函』の「奪貂」の条¹⁵⁾にも見られる。『淵鑑類

函』とは、前掲した類書『古今図書集成』とはほぼ同じ時期に康熙帝の命によって作られ、詩賦の用に供されたものである。故事・典故を探索するのに最も重宝で、古今類書の淵海ともいえるべきものであるから、この名が付けられたのである。日本最大の漢和辞典『大漢和辞典』（諸橋轍次編、大修館書店）も編集に当たって、この『淵鑑類函』をかなり参照し、採録した。かつて大正時代の日本文人たちの間でも知られていたようである。佐藤春夫は「李太白」執筆の際に親友谷崎潤一郎からこれを使うようにと、助言をもらい、上野図書館に行き、いろいろ参照した¹⁶らしい。のちに処女著作集『病める薔薇』が出版され（天佑社、大正七・十一）、得た稿料から二十円を使い、この書物を購入しようとした¹⁷ほど、熱心に研究したという。佐藤の文学上の争友とされる芥川龍之介の蔵書目録にもこの書物が見られる¹⁸。

さて、この『淵鑑類函』で伝えられている「奪貂」逸話は、前述杜甫「寄李十二白二十韻」詩の他、なお「飲中八仙歌」¹⁹における李白の泥酔ぶりの描写、及び唐の范伝正の文章（「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑」）の内容²⁰などを踏襲しながら、次のように伝奇風に語られている。

唐明皇召李白作樂章、白佯醉不起、帝曰、賦成以貂豹錦袍与脚、白起授筆而成、帝故戲之不与、白奪其袍、帝笑而与之。

ある日、玄宗皇帝が李白をお召しになって、詩を作らせようとしたが、李白はグデングデンに酔っていた。皇帝が李白に、よい詩ができれば御衣「貂豹錦袍」を与えようとおっしゃった。お言葉を聞くと、天才詩人李白は直ちに起き上がり、筆をとって間もなく詩を書き上げて献上したものの、玄宗皇帝は戯れに「錦袍」を与えてくれない。そこで、李白はその「錦袍」を奪い取ろうとした。満面に笑みを浮かべながらようやく皇帝がそれを賜った。このように、天子の寵愛を受けた李白の拔群の詩才を伝える逸話は、後世に残り、人々の興味を惹いた。

面白いことに、ここで登場する李白の、いわゆる「錦袍」の文様は、はっきりと「貂豹」と示される。杜甫が「寄李十二白二十韻」に言った「猊錦」は、たぶんこの『淵鑑類函』でいう「貂豹」の文様ではなかろうか。それも陣羽織

ならでは飾り文様である。史書や唐代の政治の要綱を編修した『唐会要』（宋、王溥撰）の記録^②を照合してみると、武後の時に度々文武官に下賜した「繡袍」は、官位の高低によって、それぞれ施された装飾文様も違うが、陣羽織の場合は一律動物の文様になる、ということがわかる。杜甫の詩や『淵鑑類函』の記述をそのまま信用するとすれば、武官ではない李白が賜った「錦袍」はどうやら陣羽織の方であり、即ち武官の統帥である皇帝の御衣であった。貂や豹の縫い模様が生きているように踊る「錦袍」を身にまとうと、その躍動感といい、その威風といい、李白はさぞやご満悦だったろう。

実際に「錦袍」を奪い返すといった類話は、李白詩集諸注本によると、かつて『宋史』に載った「李白外伝」に最も詳しく語られたという^③。それまでの史書と違い、『宋史』『芸文志』には大量の小説の類が載っている。たとえ奇聞珍説の類でも、伝奇体のようなものでも、その中に多く採録されている。中国の小説史においては、注目すべき点であろう。残念ながら、李白諸伝奇をより詳しく伝えたこの「李白外伝」は、現存の『宋史』『芸文志』^④から姿を消し、散逸しており、目次のみが後世の我々に残され、現在はその全貌を確かめる術もない。中国の古典演劇史において、その本格的なものとしては最も早い時期のものである宋元南戲は、明末の徐渭著『南詞叙録』に整理されており、その中にも「李白酒錦袍記」の名が南戲のリストに取り上げられているが、こちらもやはり未見ということで、残念としか言いようがない。

このように、宋之間の逸話と違い、大詩人李白にまつわる「奪袍」エピソードを伝える文献はあまりにも少ない。肝心の李白自身はそれに関して果たして言及しているかどうか。「錦袍」を奪う、という話は彼の詩文の中に見当たらないが、「錦袍」を賜った経緯ならば、「温泉侍従帰逢故人」という詩において述べられている。それは、杜甫と知り合う前に、翰林供奉として、李白が温泉宮の行幸に陪従して、やがて帰京した時、旧知の人に逢って賦した詩である。李白は、この詩の冒頭にまず漢朝の宮廷詩人で賦の大家でもある揚子雲のある事跡を取り上げて、次のように語る。

漢帝長楊苑 誇胡羽獵帰 漢帝の長楊苑 胡に誇つて羽獵して帰る
子雲叨侍従 献賦有光輝 子雲叨りに侍従し 賦を献じて光輝あり
激賞揺天筆 承恩賜御衣 激賞して天筆を揺かし 恩を承けて御衣を賜ふ
昔、漢の成帝は、禽獸を長楊苑に集め、狩獵を催され、胡人に中国の豪華な遊
戯を誇示した。その時、揚子雲はかたじけなくもその行幸に陪従して、長楊の
賦を献じて、大いに面目を施した。李白が温泉宮の行幸に陪従した時も、ち
ょうどそんな風であって、極めてよく似ている。侍従中、李白がしばしば詩賦を
献じたところ、天子の歡感に預かり、わざわざ御筆をもってその旨を注記せら
れ、恩賞を蒙って、「御衣」まで頂戴したのである。

揚子雲のことを借りて李白が自慢話を吹聴しているかとも思えるが、実はそ
うではない。彼が献上したと考えられる詩賦の一つ、「大獵賦」は、「荒淫侈靡」
な生活を送ってはならぬ、何ら国民の為にならぬ狩獵を止めよ、と玄宗を諫め
ているのである。太平の世の中でも反乱の兆しに気をつけ、機を逃さずに防い
で安逸を貪っていてはならぬ、と考えた李白は、さらに才能ある賢人を招いて
重く用い、国民が安心して仕事に励み、平和で豊かな生活を送れるよう、と玄
宗に進言したわけである。

では、李白が「大獵賦」を献上して頂戴した「御衣」はいかなる服だったろ
うか。諸注本では、皆異口同音に「宮錦袍」としている。それはまた李白が長
安を去る際の作と思われる「東武吟」²⁴詩にいう「錦衣」でもあろう。前述し
た漢の武帝の皇后衛子夫が賜った御衣「錦袍」の話の思い出していただきたい。
李白の「擬恨賦」²⁵という詩では、それに言及し、「錦衣」と表記されている。

前掲「温泉侍従帰逢故人」詩の他に、この「東武吟」詩においては、またも
や温泉宮に侍従した場面が出てくる。

宝馬麗絶景 錦衣入新豊 宝馬 絶景に麗しく 錦衣 新豊に入る
李白は温泉宮に随従する時、名馬に跨り、「錦衣」（「錦袍」）を着て、温泉宮の
西北にある新豊市に入った、と宮廷文人だった時の生活を回想しているよう
であるが、李白の好んだ南朝宋の鮑照（明遠）の詩に「代東武吟」²⁶があるのを

忘れてはいけない。その大意は、寒郷の人が武人となって大いに活躍したが、頼みとした将軍が死んだので窮して郷里に帰り、うらぶれた田園の生活に昔の盛時を追憶して、徒らに千載の恨みを結ぶ、というもの。都長安を離れた李白はこの時、幾分そういう心境だったのではあるまいか。

李白が召された温泉宮は、驪山の北麓にあり、歴代の天子の避寒地とされ、湯の歴史は実に古く、かの楊貴妃が愛用した華清池のある華清宮の旧名である。玄宗は毎年冬になると、華清宮を訪れ、冬の三ヶ月間、この地が、唐朝の政治の中心地となった。そして華清宮へ行幸する天子の華麗な行列のなかで、ひときわ華美であったのは、言うまでもなく権勢盛んな楊貴妃一族のものであった。²⁷きらびやかな「宮錦袍」を着る李白の姿もその中にあったらう。

李白が「御衣」を賜った経緯はこれで分かるが、「錦袍」の語句が直接現れる詩といえば、「憶旧遊寄譙郡元參軍」にしか見られない。この詩の一節を掲げておこう。

袖長管催欲輕拳　袖は長く　管は催して　軽く拳らんと欲す

漢東太守酣歌舞　漢東の太守　酣にして　歌舞す

手持錦袍覆我身　手に錦袍を持つて　我が身を覆ふ

我醉横眠枕其股　我は酔うて　横眠して　其の股を枕にす

この詩は李白が旧遊を追憶して譙郡に赴任した元參軍に寄せたのである。詩で名を揚げた李白が当時交遊するものは、海内の賢人豪傑、青雲の高きに上れる名士ばかりであった。そのなかでも元參軍という人とよく気が合って、大の仲良しであった。二人は別れるに忍びず、元參軍が李白に随行して漢東に来たのである。漢東の長官が出迎え、さて宴会が始まる。笛の急な拍子に合わせ、長い袖を振りかざし、軽く飛び上がるようにして、漢東の長官が興酣に乗じて歌い舞った。彼が手に「錦袍」を持って李白の身を覆ってくれたので、李白は酔って横たわり、その股を枕にして眠ってしまった。宴会の席では意気が天を凌ぐものがあつたが、それも束の間であり、やがて各々分かれざるをえない時が来た。この詩に、李白はまた次のように感嘆する。

此時行楽難再遇	此の時 行楽 再び遇ひ難し
西遊因献長楊賦	西遊し 因つて献ず 長楊の賦
北闕青雲不可期	北闕の青雲 期す可からず
東山白首還帰去	東山 白首 還帰し去る

その時の行楽は二度と遇い難いもので、今にも忘れかねる、という。西遊して長安に入り、かの揚雄（子雲）が長楊の賦を献じた如く、李白も詩文をもって宮仕えしたが、宮廷における青雲の高位に達する見込みがなく、白髪頭をかかえて東山の隠居に帰り去ったのである。

そもそも李白詩集諸注本で触れた「宮錦袍」の語句は、『旧唐書』^⑳の「李白」伝に「嘗月夜乗舟、自采石達金陵。白衣宮錦袍、於舟中顧瞻笑傲、傍若無人。」として初めて見られる。李白は月の夜、采石磯の江上に舟を浮かべて遊び、「翰林供奉」として出仕していたときに着ていた錦の衣（「宮錦袍」）を野外でもなお惜しみなく着ながら、傍若無人に振舞う、と語られている。それ以来、後世の詩評類や類書^㉑などになると、恰も先人宋之問の「錦袍」を奪い返す故事に対抗するように、李白が着る「錦袍」は、もはや「宮錦袍」以外ではありえなくなる。月の夜に、舟に乗りながら、采石から金陵に遊ぶ場面の描写は、たぶん李白自身の詩「自金陵泝流過白壁山翫月、達天門、寄句容王主簿」か「玩月金陵城西孫楚酒樓、達曙歌吹、日晚乘醉着裘烏紗巾、与酒客数人棹歌秦淮、往石頭訪崔四侍御」詩からきていると思われる。

（四）「宮錦袍」をまとった左拾遺翰林学士李白の姿

これから話は意外な展開を見せる。なんと李白が酔狂の余り、水にうつる月影をとらえようとして溺死したことになる。病死したにもかかわらず、好事家によって、李白の終焉はつい「捉月溺死」伝承に美化され、さらに「捉月騎鯨」伝説までに神仙化されてゆくことになる。

李白の「捉月」伝説といえば、興味深いことに、その終焉場面において、自由放恣な言動とともに、なぜか李白は必ず「宮錦袍」もしくは「錦袍」を着て

いるのである。すなわち史書の記述に由来する終焉場面に臨む李白の「詩人像」としては、もはや不可欠要素の一つではないかと思われるぐらい、後世の詩人達が謫仙人を歌う詩には必ずといっていいほど「(宮) 錦袍」がつきもので、その例は実に枚挙に遑がない³⁰。北宋の詩人梅聖俞の詩（「采石月下贈功甫」³¹）によれば、月をとろうとして水中に身をおどらせたとき、大きな鯨がやってきて、「錦袍」をまとった李白を背中に乗せ、青天に上った、と次のように耽美的に描かれている。

采石月下訪謫仙	采石の月下に 謫仙を訪へば
夜披錦袍坐釣船	夜 錦袍を披て 釣船に坐す
醉中愛月江底懸	醉中 月の江底に懸かるを愛し
以手弄月見飄然	手を以て月を弄べば 身は飄然たり
不応暴落飢蛟涎	まさ 応に飢蛟の涎に暴落すべからざれば
便騎鯨上青天	すなは 便ち当に鯨に騎りて青天に上るべし

昔から人々が喜んで言ったり聞いたりしてきた「捉月」伝承に、この鯨に跨りながら昇天する伝説（「騎鯨」伝説）が付加されると、李白伝奇はますますエスカレートし、のちに白話小説「李謫仙酔つて嚇蛮書を草すること」（明、馮夢龍編著『警世通言』「李謫仙酔草嚇蛮書」³²）にも採り入れられ、道教的神仙譚に敷衍されていく。日本の江戸時代に、中国の白話小説集『三言二拍』の中でも特に文人の奇行に関心を寄せた沢田一斎（奚疑主人）が「李謫仙」を読み下し、『小説粹言』（一七五八年）に収めている。俗伝と正史を織り交ぜ綴ったこの小説の中で、李白は宮廷から追い出されるとき、皇帝から頂戴した「錦袍」を身にまとい、馬に乗って都長安を發ち、ずっと「錦衣公子」の名で押しとおし放浪の旅を始めた。路上でいろいろな出来事に逢い、のち月夜に采石江に遊んでいたとき、上帝の迎えを受け、李白が鯨魚に乗って仙界にもどり、太白星の星主の任に復した、という。一方では市井の平民と仲良くし、他方では帝王の尊厳を軽視する。このように李白らしく宮中秩序を無視した詩人像は、通俗小説としてのエンターテインメント要素がかなり強く、史実よりなお庶民

の心を強くつかんだ、と言わざるを得ない。

李白が玄宗に直々に謁見することを許され、破格の榮譽をもらい、国専属の学者（「翰林供奉」）という身分で翰林院に置かれたのは、皇帝に代わって文書を書く仕事をするためであった。宮中での宴会や天子の遊行の際には、いつも天子のそばにいて詩を作り、宮廷の娯楽に花を添えたり、泰平の世を謳歌したりした。実際、玄宗が李白を寵愛したのは、李白の宮廷詩人としての才能を認めたからに他ならない。しかし、李白は単なる従順な御用文学者にはなろうとしない。政治の上でも才能を発揮し、自分を重く用いて欲しいという期待を玄宗に寄せていたのである。

ここでもう一つ高青丘が李白を詠嘆する「謫仙像」^③詩の一部を紹介しよう。

妃子唄来供奉婦　妃子　唄りて　供奉　婦り

金陵酒洩旧宮衣　金陵の酒は洩ぐ　旧宮衣

李白はその放恣な言動を楊貴妃や高力士に疎まれ、やむなく宮中を去り、四方を放浪した果てに、金陵に来て痛飲した。酒がこぼれて「宮錦袍」を汚すくらい、意のままに飲んだ、と高青丘は不遇になった李白の自由奔放さに共感する。天才肌の李白のその気魂の豪快さが、いかに後世の詩人達に愛されたか、これでもわかる。

見てきたように、「錦袍」を賜ること、或いは他人に与えたはずの「錦袍」を奪い返すというようなことは、抜群の詩的才能を拾遺に認められ、天子の知遇を得てのことではなければならない。結局、宋之問の「奪袍」故事より、後世の人々にとってより印象深いのは、むしろ宮中を去ってのちも汚れを惜しまずなお「宮錦袍」をまとった李白の洒脱さではないだろうか。不思議なことに、李白死後の「宮錦袍」のありかまで、清時代の地理志『太平府志』^④には「暮雲亭」という所（旧名は捉月亭）にある、と示されている。

一方、李白をこよなく寵愛した玄宗はどんな皇帝だったろうか。彼は数十年続いた則天武后や太平公主とその側近による政治を廃した。その後、太宗朝を模範とする封建帝国本来の在り様、即ち皇帝と官僚による唐帝国本来の姿に努

めて返そうとした。若い頃精力的に政治に取り組み、優れた人材を用いていた玄宗皇帝に対し、後世の評価は高い。しかし、過去の実績に満足し、内外に権力をふるう宦官による粉飾に惑わされ、すっかり油断していまい、宮殿の奥深くに引っ込み、楊貴妃と歓楽の毎日を過ごすようになったのも否めない事実である。冬は温泉宮に行幸し、歌舞や色事にうつつを抜かした。李白が「宮錦袍」を頂戴した背景には、こうした退廃的な宮中生活の状況がありありと反映されている。

宮中で頭角を現し、御衣の「錦袍」を着用した李白はさぞ得意満面だったろうが、ついに玄宗に疎まれ、政治的抱負も実現できないまま、長安を離れた。漢王朝の賦の大家揚子雲もかつて政治の上で志を得ずに一生著作に従事し、かえって権力者からの迫害を受けたことを忘れてはいけない。前にも述べたが、李白は揚子雲を慕い、度々自分の詩の中でその事跡を愛頌したのである。

こうして、暗黒の政治の渦から抜け出した李白は、存分に酒を飲み、思いのままに振舞う自由な生活に戻れるはずであった。しかし、李白は、宮中生活に未練があるかのように、客寓地であえて「宮錦袍」を着用し続ける。それは、詩的才能の比類のなさに対する強い自負心を象徴的に、しかも端的に表すとともに、権勢赫々たる貴族や権力者を軽蔑する李白の非妥協的な性格を窺うこともでき、天真爛漫かつお茶目な李白の姿とばかりはいえないと思う。李白の「宮錦袍」の初出史料を『旧唐書』とすれば、則天武后のことを借用し、孫である玄宗皇帝のことに喩えて、退廃的な宮中生活の糜爛を諷刺する史家の意図も決して無視できない。想起していただきたいのは、則天武后が文武官に「繡袍」を下賜したことに対する史家（『新唐書』）の批判³⁵である。

武后擅政、多賜群臣巾子、繡袍、勒以回文之銘、皆無法度、不足紀。
そうだとすれば、李白がまとった「宮錦袍」には、贅沢で快楽にひたっている貴族や権力者への深い憤りの意味も史家の手によって含まれていると言わざるを得ない。

(五)「恩賜の御衣」をしのぶ詩臣菅原道真の姿

ここで一転して、「錦袍」の話をも中国の詩壇から日本の醍醐天皇の時代に飛ばそう。同席者で出来を競う詩歌の会が催され、天皇の感銘を得た際の褒賞として、「御衣」を頂戴する話が、かつての日本でも見られる。「恩賜の御衣」という古来のしきたりは、やはり天皇などの位の高い者から低い者に、褒美として御着衣を授けるというものである。これは当時の貴族社会では最高の褒美の一つであったが、宋之問の「錦袍」を勝ち取る逸話や李白の「宮錦袍」エピソードの日本編というべきか、何か偶然ならぬ気がする。

言うまでもなく、それは学問の神様とされる菅原道真の、禁中での有名な挿話である。道真の祖父菅原清公が遣唐判官として唐に渡り、弘仁九（八一八）年に儀式・衣服を唐風に改めることを提案し、孫の道真が幼くして衆に秀で、白楽天の再来と称えられ、しばしば重陽の詩宴に列座を許され、数多くの重陽応制詩を残し、帝より「御衣」を賜るまで、学会の一大勢力をなしていた。しかしその隆盛を喜ばない者がいた。

『建保本天神縁起』^⑥第八段「延喜帝、朱雀院に行幸」によれば、昌泰三（九〇〇）年正月三日、延喜の帝は寛平法皇と密議され、道真をお召しになり、「天下の政事は、あなたが一人で取り仕切るように」と仰せ下された。道真は「ただいまのお召しについては、臣下が怪しいと感じたかも知れない」と判断なされ、「春生柳眼中」という詩の題を出され、「お召しの件はこのことでした。各自詩を献上なさって下さい」とその場をうまくとりつくろわれたから、陣の外に退かれた左大臣も納得し、席に戻る。詩宴が催され、「闘詩」が行われるのである。道真の詩に嘆賞し、両皇並びに后宮がそれぞれ御衣をお脱ぎになり賞として下賜された。右大臣の栄耀はこの上もないものであったが、左大臣の様子が普段とすこし変わった。「恩賜の御衣」はこの一回のみではなかった。同年九月九日、重陽詩宴が行われ、その翌日の後宴のことではあったが、道真は右大臣右大将として醍醐天皇の側近に侍し、詔によって「秋思」の題をいただき、他の人々の作とは違ったひとときわ激しい苦悩をたたえる漢詩（「九日後

朝、同賦秋思、応制」³⁷⁾を作った。その詩の「君は春秋に富み臣は漸く老いたり、恩は涯岸^{がいがん}無くして報いむことはなほし遅し」が名句で、道真は重臣として天皇に仕える職責を十分に果たし得ない苦悩を嘆いている。「後朝」の宴というだけに、うちとけた雰囲気の中で、先代以来の寵臣が年若い天皇に忠臣としての心情を訴えることができた。率直で遠慮のない詠みぶりに、叡感のあまり、帝は御手ずから「御衣」を脱いで道真に賜ったのである。前者の伝説はおそらく後世の作り事であったろうが、後者の話は『日本紀略』や『大鏡』『左大臣時平伝』、『古今著聞集』『江談抄』の他に、『十訓抄』第六「可存忠直事」³⁸⁾によって、次のように、もっとも詳しく語り継がれている。

菅原、昌泰三年九月十日宴ニ、正三位ノ右大臣ノ大将ニテ、内ニ候ハセ給ケルニ、

君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遅。

トツクラセ給ケレハ、叡感ノ余リニ、御衣ヲヌキテカツケサセ給シヲ、同四年正月ニ、本院ノオトドノ奏事不実ニ依テ、俄ニ太宰権帥ニウツサレ給シカハ、イカハカリ世モウラメシク、御鬱モ深アリケメトモ、猶君臣ノ礼ハ忘カタク、魚水ノ契モ忍得スヤオホエサセ給ケン、都ノカタミトテ、彼御衣ヲ御身ニソヘラレタリケリ。サテ次ノ年同日、カクソ詠セサセ給ケル。

去年今夜侍清涼、秋思詩篇独断腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜余香。

(『十訓抄』)

そうこうしている中に、密議と言っても、その年の内に事実を耳にし、左大臣は念入りに道真の無実の罪を天子に進言した。翌年正月二十五日、突如として、道真は太宰員外の帥に左遷された。鎮西の謫所より遙か都の空に思いををせ、また宮中での栄達を思い返しては、恩賜の「御衣」を捧げもち、天顔を廃する思いで、「御衣」にまつわる残り香をかぐ、と道真は漢詩(『菅家後集』「九月十日」³⁹⁾)に詠んだ。この有名な「去年の今夜」にはじまる「九月十日」詩篇は、ちょうど一年前に詠まれた「秋思」応制詩と並び、道真の代表的な作品として人口に膾炙するが、菅原の自注には、「宴終わりて晩頭に御衣を賜へ

り。今身に随ひて^け笥の中に在り。故に云ふ」と記されている。「恩賜の御衣」に焚き染められていた香のかすかな残りは、道真にとって、失われた過去を今に伝えるかけがえのない形見であった。

道真のこの二首の漢詩を論じる者は大半白居易の詩を引き合いに比較する^{④①}が、「御衣」を賜る一節に関しては、前掲宋之間や李白「激賞揺天筆、承恩賜御衣」（「温泉侍従帰逢故人」詩）の文句に極めて背景が類似しているのではないかと指摘したい。中国の魏文帝（曹丕）に由来し、日本に伝わる重陽節会の始まりは、天武天皇十四（六八五）年の『日本書紀』の記録が最古のものとされるが、文学賦詩を行事内容としたのは、平城天皇の大同二（八〇七）年宴に始まったらしい。最盛期としての特色を現す事柄が、宇多・醍醐両朝に見出される。道真が都から離れて讃岐赴任時に宮中の重陽詩宴を回想する詩を頻繁に作り、大宰府においても「詩臣」としての姿勢が一貫して変わらぬことは、道真にとって国家に報じる方法とは、宮中の詩宴へ参加し、詩を詠むことであった。^{④②}

『源氏物語』『須磨』を見れば、配所須磨に隠棲した源氏も、八月十五日満月の夜、「恩賜の御衣はいまここにあり」と道真の詩を引用して、帝に不遇を訴えている。『とはずがたり』『浅草寺詣で、秋月の述懐』においてもそのような趣旨を伝えている。明治期に、「近代国家」への途上に現れる歴史画のモデルとして、とりわけ頻度高く図像化された菅原道真であるが、早くには十二世紀の絵巻物に登場していたのは周知の通りである。多種多様の材料に拠りながら、「天神様」の物語を主題とした国宝北野天神縁起絵巻（承久本、北野天満宮蔵）^{④③}は八巻からなり、数ある天神縁起絵巻の中で、最古の大作とされている。その第四巻第三段「恩賜の御衣を拝する段」の画面に、菊花紋がついていゝみだれ^け篋、すなわち^け笥が描かれ、緋色の「御衣」がその中に入っているのである。これは「九月十日去年今夜」詩に基づき、絵巻全巻を通じての圧巻であろうが、白居易の「朱衣只在殿中間」詩句をも思い浮かばせる点は確かに否めない。明治になって、その模写も狩野友信や川辺御楯によって度々行われ、小堀鞆音も帝室博物館の模写事業の一環として住吉広一とともに「北野天神縁起

絵巻」を担当し、明治二九（一八九六）年に博物館に納入している。翌年、小堀は東京美術学校の教授となるが、美術学校騒動に際して岡倉天心らとともに明治三一（一八九八）年四月二六日に辞任する。七月に、日本美術院創設に加わり正員となる。その年の秋、第五回日本絵画協会・第一回日本美術院連合絵画共進会に、「恩賜の御衣」を出品し、銅牌を受け、さらに『日本美術』創刊号（明治三一・一〇）に同作品が収められることになる。同誌の「新作説明」として、次のような記述がある。

智を竭し忠を尽し、而も讒に蔽障せられて君を怨み人を恨みたるは屈平なり。昔公亦此悲運に遭うて、太宰府に泣く。されど道真は君を怨まず、恩賜の御衣は彼の聯念を呼び起して止まる所を知らず。而して氏の筆は能く道真其人を現せり。彼は悵然として御衣に対す、而も君を怨むの情なくして、唯愀然襟を正して端坐す、無限の情趣自ら其中に在り。

讒言により太宰府へ配流となったことへの怨念の情と、なお捨てきれぬ君子への忠節心との間で苛まれる菅原道真の姿は、当時の小堀にとっては格好の題材であったろうが、描かれた御衣の色は、なぜか緋色ではなく、青色となっている。

日本最初の子ども向き歴史読物の叢書『家庭教育歴史読本』（博文館）は明治二四（一八九一）年より刊行され、ベストセラーになっている。その背景に、当時の教育界からの強い要請があったことは無論であるが、その第六編^④に、「恩賜の御衣」篇が登場するのに注目したい。当時の教育界では、功利主義的な色彩が強いとされる「学制」（一八七二年）の理念から、皇室崇拜と忠孝を旨とした「教育勅語」（一八九〇年）の理念へと、転換が行われている頃であった。これに伴って、忠孝を尽くした人物を中心に国史を教えようとする歴史教育の方向が確立され、子ども向けの歴史読物が待望されていたのである。そこには武家政権を軽視した「純粹皇国史観」も窺われる^④。国民教化の指針（『教育勅語』）に沿って、忠臣の逸話として、「恩賜の御衣」を取り上げるのは好都合であったろう。過去の歴史場面の解釈替えが頻繁に起こる傾向に便乗し、

国民教育のいろいろの場合に、道真の伝奇や事跡はこの時期に集中的に紹介されていた。例えば高山樗牛は、明治三三年三月、同文館より『菅公伝』を出している。樗牛は、小堀「恩賜の御衣」が発表された機会に、菅原道真について抱かれていた見方を集約したような評言を残している。

我菅公は（中略）忠君の一念に執着して、君が自分を知られぬと言ふことを毫も怨まざるのみならず、佳節に逢うて恩賜の御衣を拝すると云ふは日本人として誠にノーブルなる所がある。（『日本美術』明治三一）

のち明治三二年から、樗牛は坪内逍遙と網島梁川との間で、「歴史画」をめぐる論争を繰り広げるが、近代的な絵画観が彼らの論争の背後に発生しているのである。

ちなみに、北野天満宮（京都市上京区）では、大正八年一〇月二九日（往時の九月九日を新暦に換算）に、久しく絶えていた旧儀を「余香祭」と名付けて再興し、以後毎年、この日に、道真が太宰府で詠んだ「去年の今夜」の詩にちなんで、道真に歌を詠んでささげる祭事が行われるようになった。一方、天神祭をはじめ、華やかな祭儀が多いことで有名な大阪天満宮では、仲秋の名月の日に、しかも浄閑の中で行われる静かな祭事がある、それが「秋思祭」であり、誠忠の臣菅公の悲愴なる心事を追憶せんとする神事でもある。

（六）佐藤春夫の「金糸魚」と谷崎潤一郎の「錦糸魚」

話の舞台をさらに大正文壇に移そう。前にも少し触れたが、大正浪漫主義作家、佐藤春夫は、まだ新進作家だった時に、文学上の師友谷崎潤一郎の推薦によって、当時の文壇の登竜門だった『中央公論』（大正七年七月号）に「李太白 A fairy tale」を発表した。この詩想豊かなメルヘン風の小説の後半に、李太白が魚になってしまい、あげくにそのままの姿で昇天し、星になる、という描写がある。中国人の従来感覚からいえば、李白が人間の姿に戻らず直接昇天する点は、奇想天外と言うべきであろう。

「錦袍」を着ながら水中の月をとろうとした謫仙人李白の姿を想像して、芸

術至上主義者の佐藤は、水中には入り魚になった李太白の姿を「金絲魚」と表現する。作中の「金亀」の言葉によれば、それは、「金の筋と、赤の筋と、碧の筋と、銀の筋とが、赤金の背を豎に縫ふやうに彩つて居ります」、「すつきりとした立派な綺麗な魚です」という。それに対し、ライバルでもあり親友でもある谷崎潤一郎は、さっそく「魚の李太白（お伽噺）—佐藤春夫君に贈る—」を『新小説』（大正七年九月号）に掲載し、お酒の海に落ち、魚となった李太白は決して「錦絲魚」ではなく、「未だにこんな赤い顔をして酔つ払つて居る」のだから、李太白は鯛でなければならぬ、と佐藤を揶揄する。鯛になった李太白の語り口を借りて、自己の正当性を主張する反面、実は李白の姿に託して、作家谷崎は自信の才能に対する自負心をも示そうとしたのではないか。

このように、ディレクタントのやりとりによって、宋之問の「奪袍」故事に由来する李白「宮錦袍」の逸話は「錦（金）絲魚」に変身した李太白、という日本独自のバリエーションを生み出したのである。文壇的には先に有名になった同年齢の芥川龍之介に刺激され、よい意味でのライバル意識を抱き、のちに多能の天才作家とも言われるほどの佐藤は、「李太白」を発表した頃はまだ駆け出しの無名作家だった。中国の白話小説「李謫仙醉草嚇蛮書」⁴⁵に描かれている「錦衣公子」の李白の姿を髣髴させるためか、佐藤は、李太白が「金絲魚」に化けた、とする。それに対して、谷崎は、宋之問の「錦袍」を奪い取る故事を浮き彫りにするかのよう、佐藤作の李太白が変身した魚を、「錦絲魚」に訂正する。面白いことに、谷崎がいうところの李太白という魚は、立派な鯛の作り物である。これは、緋縮緬で拵えひょうきんな顔をする三尺くらいの高さもある鯛なのだが、なんと魂があって、しゃべったり動いたりするのである。谷崎はしゃべり動く鯛の語り口を借りながら、実にユーモア溢れる好短篇に仕上げている。これは、当時の日本の文人達に見られる「支那趣味」⁴⁶に基づく文学的遊戯だとすれば、こういった機知的技巧の表現によって、李白が魚になってから仙界に戻るのも悪くない洒落であると言えるかもしれない。

終わりに―「錦袍」の烙印―

明治一四（一八八一）年五月に創刊された『文陣 錦袍餘談』⁴⁷は序文として次のように書き記している。

本集刊行ノ趣旨ハ近古現今諸家ノ詩歌文章日記隨筆問答書講義考証奇士
偉人ノ伝其他総テ学事上ニ裨益アル諸論說雜記ノ未ダ大ニ当世ニ見ハレザ
ル者ヲ拔摘蒐輯シ広ク之ヲ江湖ニ伝ヘ以テ文化ノ万一ヲ裨輔セントスルニ
アリ
（「凡例三章」より）

これで該雑誌名の意味するところがうなづける。また桜田百華園（百衛）の政治小説には、『阿国民造自由廼錦袍』⁴⁸がある。政治小説の飛躍的転換点ともされ、読本的な志の追求と人情本的な恋愛場面が混交し、国家と社会のための平民主義、精神の自由が記述されている。少なくとも明治十年代までは宋之間や李白の「錦袍」逸話に関する知識を、当時の教養層は持ち合わせていたことが確認できよう。漢文の素養の豊かな佐藤と谷崎は換骨奪胎の手法でそれを巧妙に自作に溶け込ませ、童話風に創作した意もあったろう。

昭和に入ると、河出書房より『世界短篇傑作全集』が出版され、その一卷として『支那短篇集』（翻訳代表者佐藤春夫、昭和一〇・九・一六刊行）があり、その中に収められた郁達夫の「采石磯」一文では、不遇な主人公が次のように李白を弔う。

江山終古月明の裏、酔魄沈沈呼べども起きず、

錦袍の畫舫寂として人無し、隱隱たる歌声江水を繞る、……。

詩の一節だけ見てもわかるように、「錦袍」は既に謫仙人李白の詩人像に欠かせない必須条件として内外の人々の心に定着している。

野外にもかかわらず惜しみなく「宮錦袍」を身にまとった李白の瀟洒な姿、そして「恩賜の御衣」の余香をかぎ、帝のお姿をしのぶ菅原道真の誠実な姿は、これからも後世の人々の目に焼きついてゆくことだろう。が、李白の「宮錦袍」に見られる諷諫の姿勢が道真にはない。「鴻儒」「通儒」への批判はあっても、学儒である道真は「恩賜の御衣」を媒介としてひたすら帝徳賛美を謳うばかり

である。一方、その「錦袍」故事を踏まえ創作された「李太白」と「魚の李太白」を通じて、当時新技巧派・耽美派とされた佐藤春夫と谷崎潤一郎の友情を語る美談がまた一つ添えられよう。

(引用文の傍点は筆者による)

〔注〕

- ①『前漢書』卷九四上「匈奴伝」第六四上その他に、『晋書』卷一一三「載記」第一三「符堅」伝上、『南史』卷四四「列伝」第三四「魚復侯子響」伝にもそれらしい記述が見られる。
- ②『通典』(唐、杜佑撰)卷六「食貨」六「賦税」下。『唐書』卷二二二上「列伝」第一四七上「南蛮」上「南詔」上。
- ③『前漢書』卷九七上「外戚伝」第六七上「衛子夫」伝。
- ④『和刻本漢詩集成 唐詩』(長沢規矩也編、汲古書院、一九七四)第一輯「王昌齡詩集」。
- ⑤『新唐書』(宋、歐陽修ら撰)卷四「本紀」第四「則天順聖皇后」の「神龍元年」条。
- ⑥史書『旧唐書』(五代・後晋、劉昫監修、張昭遠ら撰)卷一九〇中「列伝」第一四〇中「文苑」中「宋之問」伝及び『新唐書』卷二〇二「列伝」第一二七「文芸」中「宋之問」伝の他に、『唐才子伝』(元、辛文房作)卷第一「宋之問」伝にも見られる。
- ⑦類書に見られる宋之問の「奪袍」逸話は実に夥しく記載され、その中からごく少数の例を次に挙げよう。

『類説』(宋、曾慥)卷五四「錦袍」、『唐詩紀事』(南宋、計有功)卷一一「宋之問」、『淵鑑類函』(清、張英)第三六五卷「布帛部」一の「錦」三の「獻詩奪袍」条及び同書第三七一卷「服飾部」二「袍」三の「奪賜之間」条、『古今圖書集成』(清、陳夢雷)「經濟彙編食貨典」第三一八卷「錦部紀事」及び同書「經濟彙編禮儀典」第三四〇卷「袍部」など。
- ⑧『文苑英華』(宋太宗、李昉ら編)應制詩部卷一七八「駕幸龍門應制」。なお、底本は広東翻刻『武英殿聚珍版書』本の「駕幸龍門應制」詩の末に宋之問の「奪袍」エピソードが記されている。
- ⑨『補注杜詩』卷一八「崔駙馬山亭宴集」の注釈に「梁樞道編在天宝十四年」とある。
- ⑩『補注杜詩』卷一八「崔駙馬山亭宴集」、『杜詩詳註』(清、仇兆鰲)卷三「崔駙馬山亭宴集」。
- ⑪前掲『補注杜詩』卷一八、『杜詩詳註』卷三及び『九家集注杜詩』(宋、郭知達編)三六卷「崔駙馬山亭宴集」、『集千家註杜工部詩集』(宋、黃希原本、黃鶴補注)卷二「崔駙馬山亭宴集」などを参照。
- ⑫『通典』卷六一「礼」二「嘉」六「君臣服章制度」。
- ⑬『新唐書』卷二四「志」第一四「車服」。
- ⑭以下は『大全集』(明、高啓)卷一二の五言律詩「謝賜衣詩」から全文を引用。

臚呼遙捧賜、服拜望蓬萊。香帶^レ炉煙下、光迎^レ扇月開。

奇紋^レ天女織、新樣^レ内工裁。被^レ沢徒深厚、慙^レ無^レ奪^レ錦才。

なお白樂天詩に「謝恩賜衣服狀」があるが、詩の内容から見て、高啓詩のように、本稿の提示する「奪袍」状況を髣髴させることがなく、「奪錦袍」故事のカテゴリーから外すことにする。

- ⑮『淵鑑類函』(清、張英撰)第三七一卷「服飾部」二「袍」三の「奪貂」条。
- ⑯佐藤春夫の回想文「あのころの私と交友」(昭三七・一二・一発行の『文芸朝日』第一卷第八号)

を参照。

- ⑰佐藤春夫は大正七年八月二日付父親佐藤豊太郎宛の手紙（平成一三・六刊行の臨川書店版『定本佐藤春夫全集』第三六巻『書簡』）に、『淵鑑類函』について次のように言及している。

いつぞや申上げた淵鑑類函といふ支那の辞書は二十円で買へるさうですから、今度金の入った時に買はうと思つて居ます。

- ⑱日本近代文学館所蔵資料目録2『芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、昭五二・七・一）に見られる『淵鑑類函』は光緒一三年石印（巻一～四五〇、四八冊）となっている。
- ⑲杜甫「飲中八仙歌」における李白の泥酔ぶりの描写は「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自称臣是酒中仙。」となっている。
- ⑳唐の范伝正が著した碑文「唐左拾遺翰林學士李公新墓碑」において、次のようなくだりがあり、
- 他日、泛白蓮池、公不在宴、皇歡既洽、召公作序。時公已被酒于翰苑中、仍命高將軍扶以登舟、優寵如是。

（以上は王琦注本『李太白全集』卷之三十一「附録」の「碑」からの再引）

- ㉑『唐會要』卷三二「異文袍」によると、「天授三年正月二十二日內出繡袍、……。延載元年五月十二日內出繡袍、賜文武從官三品以上、……諸王即飾以磐石及鹿、宰相飾以鳳池、尚書飾以對雁、左右衛將軍飾以對麒麟、左右武衛飾以對虎、左右鷹揚衛飾以對鷹、左右千牛衛飾以對牛、左右豹韜衛飾以對豹、左右王鈴衛飾以對鶴、左右監門衛飾以對獅子、左右金吾衛飾以對豹。」とあるように、武官武將に下賜した「繡袍」の文様がこれで分かる。なお、『旧唐書』卷四五「志」第二五「輿服」においても「繡袍」の文様についてほぼ同じような記述が見られる。

- ㉒杜甫詩集諸注釈本で見られる『李白伝』に関する記述は、例えば次のようになる。

白外伝、白作樂章、贈以錦袍、又見宋之間伝。（宋、蔡夢弼『杜詩註』）

白外伝云、白作樂章、賜以錦袍。（『註杜詩』二〇）

洙曰、李白外伝云白對明皇撰樂府新詞得宮錦袍。（『補注杜詩』卷一八）

史又撰『李白伝』一卷、事又稍周。（宋、李翰林別集序）

これらの注釈に対して、清の王琦『李太白集』注本が、「史所撰李白伝、即宋史芸文志所載樂史李白外伝一卷是也、今亦不伝。」と注を下している。

- ㉓『宋史』卷二〇三「志」第一五六「芸文」二「樂史」。

- ㉔李白の「東武吟」はまた「出金門後書懷留別翰林諸公」ともなる。

- ㉕李白の「擬恨賦」に登場する衛子夫の話は「若夫陳后失寵、長門掩扉日冷、金殿霜淒錦衣、春草罷緑、秋蛩乱飛、恨桃李之委絶、思君王之有違」となる。

- ㉖『鮑明遠集』（南朝宋、鮑照）卷三「代東武吟」。

- ㉗『新唐書』卷七六「楊貴妃」伝及び王建的「温泉行」詩によると、唐太宗が貞観一八（六四四）年、驪山の北麓に離宮を作り、咸亨二（六七一）年、温泉宮と名付けたが、玄宗は天宝六（七四七）年、名を華清宮と改め、湯井を華清池と名付けた、という。そして李白は天宝二（七四三）年、玄宗に従って驪山に赴き、「侍從遊宿温泉宮作」という詩を残している。

- ㉘『旧唐書』卷一九〇下「列伝」第一四〇下「文苑」下「李白」伝。

- ㉙詩評類や類書に見られる李白の「宮錦袍」記述は大半『唐書』に依拠することがわかる。例えば次のようになる。

李白着宮錦袍、遊采石江中、傲然自得、傍若無人、因醉入水中捉月而死。（この記述は現行の五代・王定保著『唐摭言』諸本には見られないが、清の王琦注本『李太白全集』卷三五「李太白年譜」宝応元（七六二）年の条からの再引による。）

李白浮遊四方、嘗乗月与崔宗之自采石至金陵、着宮錦袍坐舟中、傍若無人。本伝。(宋、謝維新撰『古今合璧事類備要』外集卷六四「錦繡門」の「錦附」の「宮錦袍」条)

李白懇求還山、帝賜金放還。白浮遊四方、嘗乗月与崔宗之自采石至金陵、着宮錦袍坐舟中、傍若無人。後代宗立以左拾遺召、而白已卒。唐本伝。(宋、楊伯巖撰『六帖補』卷一五「袍」の「宮錦袍」条)

嘗乗月与蔡宗之自采石至金陵、着宮錦袍、坐傍若無人。(『唐才子伝』卷第二「李白」)

李白月下乗舟采石、著宮錦袍、旁若無人。(『淵鑑類函』第三六五卷「布帛部」一「錦」三「着宮錦袍」条)

李白本伝、夜月乗舟采石、衣宮錦袍、顧瞻笑傲、旁若無人。(『淵鑑類函』卷三七「服飾部」二「袍」四「宮錦袍」条)

文芸伝、白浮遊四方、嘗乗舟与崔宗之自采石至金陵、着宮錦袍坐舟中、旁若無人。(『古今圖書集成』「經濟彙編食貨典」第三一八卷「錦部」の「紀事」)

李白伝、白浮遊四方、嘗乗月与崔宗之自采石至金陵、着宮錦袍坐舟中、旁若無人。(『古今圖書集成』「經濟彙編禮儀典」第三四〇卷「袍部」)

- ③⑩『李太白集註』(清、王琦注本)第三一卷の「附録」「序志碑伝」と第三三卷「附録」「詩文」と第三六卷の「附録」「外記」だけから試しにその例を引くと、実に夥しく見られる。ここでは省略する。

- ③⑪『宋詩紀事』(清、厲鶚)卷二〇「梅堯臣」の「采石月下贈功甫」。

- ③⑫『警世通言』(明、馮夢龍編著)第九卷「李謫仙醉草嚇蛮書」(嚴敦易校注、北京人民文学出版社、一九五六・一)。

- ③⑬『李太白集註』(清、王琦注本)第三六卷「附録」「外記」からの再引。

- ③⑭「暮雲亭」に関する次の記述は『李太白集註』(清、王琦注本)第三六卷「附録」「外記」からの再引である。

旧名捉月亭、元時圯、後重建、乃藏李白宮錦処。

- ③⑮『新唐書』卷二四「志」第一四「車服」条。

- ③⑯三重県伊勢神宮文庫収蔵『北野事跡、天・地』(一六六二年の写本)二冊の古文書は、天神縁起や天神縁起絵巻の縁起文の類本の一つと考えられている。本文中に「建保」の年号が見えることにより、『建保本・天神縁起』と呼ばれ、現時点では、諸天神縁起絵巻の詞書の基本になったと考えられている。

- ③⑰『菅家文草』四七三の「九日後朝、同賦秋思、応制」詩。

- ③⑱『古典文庫』第三五二冊『十訓抄』(泉基博編、古典文庫、昭五一・四・二五、底本は宮内庁書陵部蔵『十訓抄』片仮名本)。

- ③⑲『菅家後集』四八二の「九月十日」の「去年今夜」詩。

- ④⑰川口久雄著『平安朝日本漢文学史の研究』上巻(明治書院、一九五九・九)の序文で、杜甫の「至日遣興二首」七律が提示され、菅原道真の「九月十日去年今夜」詩が杜甫の詩の文句「去年の今日竜顔に侍す、……朱衣ただ殿中の間に在り、孤城此の日腸断つるに堪へたり」に似ていると指摘。

- ④⑱菅原道真における「詩臣」の態度は次の諸論を参照されたい。

秋山虔「古代官人の文学思想」(『国語と国文学』一九五五・四)

同氏「菅原道真論の断章」(同誌、一九五七・一〇)

同氏「菅原道真の詩人形成」(『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四)

大曾根章介「菅原道真一詩人と鴻儒一」(『日本文学』一九七三・九)

後藤昭雄『「文人相軽」一道真の周辺』(同誌同号)

藤原克己「文章経国思想から詩言志へ―勅撰三集と菅原道真―」(『国語と国文学』一九八〇・一一)

同氏「平安朝の知識人―文章道と菅原道真―」(『講座日本思想 2 知性』東京大学出版会、一九八三)

同氏「平安朝の漢文学」(『古代史研究の最前線四〔文化篇下〕』雄山閣、一九八七)

鈴木日出男「菅原道真における詩と思想」(『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇)

工藤重矩「平安朝における『文人』について」(『平安朝律令社会の文学』ベリカン社、一九九三)

④②国宝北野天満宮縁起絵巻は承久元(一二一九)年に作成(藤原信実画)された。現存する多数の北野天満宮縁起のうちで最も古く、最も大きい根本縁起といわれている。

④③『家庭教育歴史読本』第六篇「宇佐の御使、恩賜の御衣」(落合直文・小中村義象合著、富岡永洗画、博文館、一八九一・一二)

④④国際日本文化研究センター『日文研基礎領域研究―文化論の基礎概念と方法―』研究代表者鈴木貞美氏は、二〇〇二年一月一日、同センターで「グローバルゼッション、文化ナショナリズム、多文化主義と日本近現代文学」を講演し、「Ⅱ日本の文化ナショナリズムとアジア主義」項目で「国民国家の組織化と国民文化の形成期」として、「教育勅語」を第一巻の巻頭に掲げた『家庭教育歴史読本』の目次内容を分析し、「この『家庭教育歴史読本』の立場は、天皇中心の忠孝を尊重し、武家政権を軽視した「純粋皇国史観」とでもいうべきものである」と指摘している。この点に関して、氏は平成12年度北米シンポジウム「日本人の価値と規範意識とヒストリオグラフィー」(“Historiography and Japanese Consciousness of Values and Norms”, Jan.26-27, 2001, at University of California, Santa Barbara and Jan.29-30, 2001, at University of California, Los Angeles)で既に発表されていた。

④⑤注②参照。

④⑥テクスチュアルな知識に基づく本格的な中国文学研究者と違い、大正文人の中で、谷崎潤一郎をはじめ、中国に関心の高い作家が、文学という場でいわゆる「支那趣味」或いは「中国文物畧展」を文人遊戯という形で作品に見せるのを「支那趣味愛好者」という。佐藤春夫もその代表的な一人である。「支那趣味」について、『別冊国文学 谷崎潤一郎必携』を参照されたい。

④⑦『文陣 錦袍餘談』創刊号(猪上武文編、積善社、明治一四・五・一三)。

④⑧『阿国民造自由晒錦袍』(桜田百衛著、舟雪居士関、東京・山崎又三郎出版)。

参考文献

1 谷崎潤一郎「支那趣味と云ふこと」(『中央公論』一九二二・一)。

2 佐藤春夫「からもの因縁―(支那雑誌の序として)―」(『支那雑誌』所収、大道書店、一九四一・一〇・一八)。

3 沈從文篇『中国古代服飾研究』(香港商務印書館、一九八一・九)。

4 川口久雄校注『日本古典文学大系七二 菅家文草 菅家後集』(岩波書店、一九八四・一〇・五)。

5 山中裕・今井源衛編『年中行事の文芸学』(弘文堂、一九八一・七)。

6 倉林正次『饗宴の研究(文学篇)』(桜楓社、一九八七・九・二五)。

本文において参考した『四庫全書』は『文淵閣本欽定四庫全書』(陸錫熊・孫士毅編纂、上海古籍出版社、一九八七)による、李白詩集注釈本は『李太白分類補註』(宋、楊齊賢集註、元、蕭士贇補

註) 三〇巻、『李太白集註』(清、王琦注本) 三六巻による。なお佐藤春夫「李太白」における「金絲魚」考察の際、新宮市立佐藤春夫記念館の御高配により、その自筆原稿のコピーを閲覧することができ、感謝の意を申し上げる。

*** 討議要旨**

佐藤道生氏は、平安時代における詩壇の君臣唱和は、六朝ではなく、初唐の太宗と臣下の唱和詩(例えば『翰林学士集』)に直接の影響を受けている、両者の共通性は場の共通性に由来するものか、と尋ね、発表者は、そう思う、と答えた。

山口博氏は、もともと蕃客に下賜した錦袍と、李白・道真のエピソードとが、どのような関連性を持つのか、と尋ね、発表者は、錦袍は蕃客だけではなく、武官(例えば関羽)にも、また『紅樓夢』には女性に与えられた話も出てくる、そういう中で、文人に与えられた例を中心に見てみた、と答えた。